

山の紀行

板坂, 耀子
福岡教育大学助教授

<https://doi.org/10.15017/11965>

出版情報 : 語文研究. 63, pp.1-12, 1987-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

山の紀行

板坂耀子

一名山と信仰

菊岡沾涼「諸国里人談」(寛保三)は卷之三の五、山野部に富士 浅間 阿蘇 妙義 焼山 立山 雲仙嶽 彦山 白峰の諸山を収録する。また橋南谿は「東遊記」後篇卷五(寛政九)に山崎安治氏も評価された「名山論」なる一項を設けて次の様に述べる。

余幼きより山水を好み、他邦の人に逢えば必ず名山大川を問うに、皆各其国々の山川を自贊して天下第一という、甚だ信じ難し。既に天下をめぐりて、公心を以て是を論ずるに、山の高きもの富士を第一とす、又余論なし。其次は加賀の白山なるべし。其次は越中の立山、其次日向の霧島山、肥前の雲仙嶽、信濃の駒が嶽、出羽の鳥海山、月山、奥州の岩城山、岩鷲山也。是に次いで豊前の彦山、肥後の阿蘇山、同国久住山、豊後の姥が嶽、薩摩の海門嶽、伊予の高峯、美濃の恵那嶽、御嶽、近江の伊吹山、越後の妙高山、信濃の戸隠山、甲斐の地蔵嶽、常陸の筑波山、奥州の幸田

山、御駒が嶽等也。

其余は碌々論ずるに不足。伯耆の大山、上野の妙義山は余いまだ是をみず、其高低を知らず。出羽の羽黒山のごとき、其名甚だ高けれども其山は甚だ低し。都の鞍馬山程にも及びがたし。湯殿山も叡山よりは低かるべくみゆ。是は仏神垂跡の地ゆえに参詣の者多きによりて其名高き也。

山の姿巖々として峻岨画のごとくなるは、越中立山の劔峯に勝れるものなし。立山は登る事十八里、彼国の人は富士よりも高しと云う。然れども越中に入りて初めて立山を望むに、甚だ高きを覚え。数月見て漸々に高きを知る。是は連峯参差たるゆえ也。最も高く聳えたがい相争う程なる峯五つあり。劔峯も其一也。其外にも峯々甚だ多く連なり、波濤のごとく連なり、皆立山なり。此ゆえにたとえば都の北山を望むのごとし。遠くより見るに何れを鞍馬山とも称しがたきのごとし。是をみても、人多能なる者は反って其名を失うを慎むべし。白山は只老峯にて根張も大に、殊に雪四時ありて白玉を削れるのごとく、見るより目覚る心地す。

又、山の姿のよきは鳥海山、月山、岩城山、岩鷲山、彦山、海門嶽なり。皆甚だ富士に似て、一峯秀出で、画がけるがごとし。又、景色無双なるは薩摩の桜島山也。蒼海の真中に只壹つ離れて独立し、最峻峻なるに、日光映すれば山の色紫に見え、絶頂より白雲を蒸すがごとく煙り常に立登る。たとえば青畳の上に香炉を置きたるがごとし。

大抵海内の名山是等に留まるべし。其山内の奇絶は又別に書あり。今此所には仰望む所を論ずるのみ。(傍点筆者)

やや下って文化元年、谷文晁の「名山図譜」には、以下の山々が描かれている。

金峰山(大和) 富士山(駿河) 妙儀山(上毛) 浅間山(信濃)
磐梯山(陸奥) 吾田多良山(陸奥) 巖鷲山(同) 鳥海山(出羽)
金剛山(河内) 高野山(紀伊) 比叡山(近江) 白山(加賀)
秋葉山(遠江) 駒嶽(信濃) 御嶽(同) 七時雨山(陸奥) 愛宕山(山城) 膽吹山(近江) 大山(相模) 那須山(下野) 天城山(伊豆) 彦山(豊前) 笠置山(山城) 葛城山(河内) 鉅山(安房) 加納山(上総) 中嶽石門(上野) 碓井嶺(同) 天岳(伊賀) 宮根嶺(相模) 日光山(下野) 無終山(紀伊) 大刈田山(陸奥) 半田山(同) 三上山(近江) 那智山(紀伊) 象頭山(讃岐) 書写山(播磨) 春日山(大和) 摩耶山(摂津) 足高山(駿河) 多度山(伊勢) 鳳来寺山(参河) 足柄山(相模) 二上山(大和) 八岳(甲斐) 先山(淡路) 南昌山(陸奥) 臥釜山(同) 御駒岳(同) 早池峯(同) 内浦岳(蝦夷) 白岳(同) 恵山(同) 玳瑁涉(同) 志利辺津山(同) 赤城山(上野) 恵奈山(美濃) 金華山(陸奥) 百丈岳(伊勢) 六甲山(摂

津) 立山(越中) 佛通寺山(安芸) 雲仙岳(肥前) 巖木山(陸奥) 霧島山(日向) 雲鳥嶺(紀伊) 築波山(常陸) 武光山(武蔵) 清水山(丹波) 阿蘇山(肥後) 吉備中山(備中) 高峯(伊勢) 朝熊山(伊勢) 比良山(近江) 屋島山(讃岐) 五釧山(同) 朝日岳(陸奥) 榛名山(上野) 二股山(陸奥) 高原山(下野) 塩原山(同) 吉野山(大和) 小野岳(陸奥) 米山(越後) 御嶽(薩摩) 雄鹿山(出羽) 大山(伯耆) 磐手山(奥州) 玉東山一名姫岳(同)

南谿が「名山論」で述べるように、これらの山々の多くは、いわゆる山岳宗教の信仰の対象としてその名を広めた。そこには、熊野は山と海にへだてられた日本の僻地であった。もしこのようなどころに熊野信仰がおこらなかつたら、この土地の名は歴史にあらわれて来なかつたであろうし、文化もひらけなかつたであろう。しかし宗教の不思議はこのような僻地なればこそ、霊と神のこもるところとして熊野信仰を生んだのである。(略)

修験道は普通山岳におこり、高山にのぼる垂直の苦行を実践する。しかも熊野は高山はないけれども、峯を越え、谷をわたり、川を徒渉するという、長途の水平の苦行を実践する修験道場であった。(五来重「熊野三山の歴史と信仰」山岳宗教史研究叢書4)

の如き、修行の場としての、あるいは霊場としてのふさわしさを持った山容、また、

山岳信仰を論ずる時に、その山を望見できるか、できないかという点は重要な問題である。

まだ信仰の媒介者が存在せず、布教活動のみられなかつた太古の

時代、見えない遠方の山は、人々の意識の上に登らなかつたである。自己の見える範圍の山だけが信仰の対象になつたに違いない。

時代は下つて、山岳に蟠踞する宗教者を媒介として、遠方の山岳信仰が伝わるようになって、その山の見える地域と見えない地域では、おのずから信仰形態が違ってくる。(牧雅子「筑波山信仰の信仰圏」・「現代宗教」2特集「山岳宗教」所収)

の如き、人々に注目されるに容易な地勢、等も条件としてあつたであらう。^註

このような山岳宗教が山の形容そのものに浄土や地獄、曼陀羅を見るのは、よく知られたところである。堯恵の『善光寺紀行』(寛正六)の

十五日に、つとめて宿坊を立かへり、土圭の影うつるばかりに、戸隠山へ至りぬ。二重の端籬を拝して奥院へのぼるに、畳々たる山の上へ至りぬ。中台に南北二つの嶺あり。各々重々に岩を重ねあげて、八色をまじへたり。千峯萬山の形の中に、異木異草ふさがりて或は佛菩薩の来化の姿もあり、或は天人聖衆の伎楽をととのへたる所も有。併観音薩埵の勝地にてぞ待らむ。

のような記述にも、その精神はあらわれていよう。近世にいたつても、多くの場合、山の紀行はすなわち参詣紀行であつた。とりわけ、身延山や高野山の紀行にそれが著しい。

(略) 月花と見たる二人の娘を去年今としに失ひ置處なき露の身の先へ消ぬかなしミながら生残りたる甲斐の身を延る御山に詣んと告るに人々馬の餞あれはいそき用意なして(筠芽「甲州こまぢの記」天明五)

六日 雨ふりつれと案内の御僧に伴ひ諸堂拜廻る結構聞しに増り感涙止まらず身延鑑に委しけれハ略して筆を留(同左)

首に掛たるものを坊の師にわたしまいらせてとふらひのわざなとたのミ奉るその童のあないにて壇上より爰かしこのたふとき限りをおかみめくるに時ハふゆながら草も木もにほひことに色ことにほこりかに金しろかねの砂ちりて吹すさむ風の音も浄土の楽のしらへに聞なし近く飛こふ鳥共も孔雀などいへるやうなる様に見なしてあやしう妙なる事多かりき(桐雨・浮流「高野紀行」安永四)

二 登山の目的

とはいえ、その板行もされた「甲州こま路の記」が、冒頭と身延の部分では一応の感傷性を示しながら、全体としては決して憂いに満ちたものではなく、山々の挿画を多く添えつつ、実用的な面も含んだかなり明かるい地誌的な紀行となっていることは、注目すべきことである。

山崎安治氏は「日本登山史新稿」中で、

このように江戸時代にはすでに多くの人たちが、山の美しさ、すばらしさを知り、宗教的色彩を持たずに登山を登山として楽しむ風潮が見えはじめているのである。ここに登場する人びとは、医師であり、文人であり、画家であり、また学者であつたということも、ヨーロッパにおける初期の登山の歴史と一脈通じるものがあり、しかもそれがまったく外来登山思潮の影響を受けていない

だけに注目すべきものと思うのである。

と述べられる。氏は同書中で多くの資料を引用して、近世の登山が従来の宗教的色彩から脱皮しつつあり、近代の登山と同様のものが生じはじめているということを指摘されており、私もこれに賛成する。ただ、登山の目的が信仰か娯楽かということについては、厳密には区別しにくい。それは、やはり近世紀行の中で大きな部分を占める参詣紀行についても同様で、庶民の旅においては、今日もそうであるように、信仰と娯楽は両立あるいは並存する場合が多い。「甲州こま路の記」も、その一例である。

事実、登山の正確な動機というものは、紀行文の一つ一つを見ても

他年富士登山の志ありしに今年春仙台の珍客奥田氏富岡氏浪華に
来り夏日飯路に赴とす予謂_テ曰六月の東行富士禪定の時也_□山之
望あらハ相從_ニ行_ニ客笑_テ云我其志ありいざといふより行李あら
ましに六月六日浪華を立出て(中谷願山『富嶽之記』享保一八
冒頭の部分)

筑波の山は常陸の国の空におわしましやつかれ仰を奉りて移り住
る紅葉の村_ノ西にあたりて朝な夕な遙におかミまつれといまた一
度もそのいた_ゞきに登りぬかつき奉りし事もなかりしをいにし十
とせばかりもあなた其あらましをねぎ奉りしにあか君よりのミゆ
るしはおわしなから公私の事のしげくしていたつらに年月を過せ
しかば身も老の境にいたりぬいまだあしよわからぬ中におぼし立
玉へなど人もすゝむるほどにこそぞ春其事を申せしかばふたゝひ
ゆるされを得たりしに婦なる人の病て常世の国に入り玉ひしほど

に去年もまたむなしくくれぬことし文化十あまり五といふ花の頃
こそと思ひたちてはらから入江正身忠八郎をかたらふにむへも同
しくまふてんと悦ひて何くれと旅のまふけて紙よすゝりよもた
る忘るゝなゝとさゝめきぬ(小宮山昌秀『遊筑波山記』文化十五
冒頭の部分)

加賀の白山、越中立山、駿河の富士此三つの山を巡りたく、年頃
日頃望むといへども、仕官の身なれば、伊勢、秋葉の外は願ふ事
も成がたくて打過しが(『三の山巡』文政六 冒頭の部分)

空も晴れやかなれハむなしく家にあらんよりハ野山に遊んと思ふ
に、いてやまた見ぬ東の高野山に詣んとて、ミちのも遠からねは、
三郎なる磯吉を伴ひて、下部ひとりを随へ、わりこを腰にして、
家を出るに(権園『あつまの高野詣』嘉永七 冒頭の部分)

のように明確にはならない。参詣と美景の鑑賞、あるいは遊覧がこ
れらの人々の中では特に区別されている様子はないのである。

三 宗教性の否定

それらの中で比較的はつきりと宗教性を排しているいくつかの例
を見よう。まず寛政七年、藤井高尚の『山つと』である。中途の店
から出て来た子供もそのまま連れて行く^註、のどかな近郊の遊山で、
その冒頭に

ひとの国などにある海山のありさまはおかしとさくもたはややく
ハえ行見ねは此わたりにさるへき所もかなと思ふをりしもある人
のいひけらくちかき所にハ郷谷といふ所こそけしきよけれ水のな
かれ山のとゝすまひなとあやくこと所に似すからめいたる所な

りといへハ見まほしくてれいのあたりはなれぬとちミたりよたり山路の花も見かてらものせんとかたらひてきさらき廿日あまり五かの日になん出たちける

と記す。あえて名山や伝統にこだわらない一つの姿勢が示されている。同様の意識は寛政十二年の平千秋『越の山つと』にも見える。この種の紀行の一要素となっているのは、特に登山とは言えない近郊の遊覧記の精神であろう。冷泉為村『嵯峨山遊覧記』、狩谷竹鞆『志賀の山越』(文久三)、広瀬水順『上野山の記』(安政三)等、いずれも明かるい娯楽としての山歩きを描き、『山つと』と共通する雰囲気を有している。

また、名山でありながら、同様の傾向を有するのは嘉永元年、多湖安利の『浅間山の記』である。宗教色はもろろん、この紀行には職業的案内人がいない。作者は友人たち数人と知人に書いてもらった地図を見ながら登山する。

人々此山を浅間山とおもひぬおのれかの鳥羽面きし図と見出す人々見てこれより直に峰にのほらんもよけに見ゆれとまのあたり山にむかへハいとさかしされハいますこし北よりのほるへしといへハ山本ぬしおのれさきかけすへしまたまへといひてかけのほる人々何れよりのほらんとかたり合うち山本ぬしハはや影はるけくうない子のことく見ゆる述のほり玉ふ

このような雰囲気は近代の山岳紀行とかわらない。小品だが魅力的な作品である。

だが、もっと積極的に宗教性を明確に、というより、激烈に否定し、むしろそれがその紀行の特色となっているものも、たとえば富士登山の紀行などには多い。富士登山の場合には特に信仰がそれだ

け俗化していたこともあるし、信仰以外の目的で登山する人が多かったこともある。その典型は清水孝之氏が解説翻刻された明和五年の池川春水『富士日記』である。

明和五つの夏、富士の雪を見んとて、善助といふしたしき人を伴ひ、無水月廿五日安房国和田村を出つと目的も登山そのものが明確であり、中途の社への信心も拒否して、先達と激しく対立する。

今朝は頭痛がはげしく熱ありて甚快からず。(略)頂上への登り始にも棚を結び、入り口に人居て手水を売る。参始めの薬師とてあり。我にも拝めといへど、素此山に來りしは日本無双の名山なれば見に來りし計にて、浅間へ詣む深願もなければ、答ていわく、我は浅間様計志し参たり。薬師は信仰にもなし、といふて行過く。凡如此所袖を引、錢を貧る所甚多し。先達がいわく、その様に申さるゝ故、山にも当りたるといふ。我いわく、我は山に当りたるにあらず。きのふの大暑に当り淨食、夕部の寝冷にて頭を病也。浅間様に心があれば悪みはなされぬ答と答ふ。

このような姿勢は珍しいものではない。寛政六年の大場維景『富嶽遊記』は、従僕らに強力の言を信じるなど注意を与えている。

此所ヨリ富嶽ヲ望メハ間シヨリ高ク峻嶽幾々トシテ目前ニ屹立タリ此ノ時従僕等ニ示シテ云ク如此ノ高山ナレハ登升ノ時ニ至リ各々疲病スベシ是ヲ郷導ニ俗ニ強ニ告レハ神ノ崇リヲ受タリト云イ又天ノ狗ノ所為ナトテ劫シ登遊ノ妨ト成ル由シ兼テ聞置キタリ故ニ若シ不快ノ事アラバ他ヘ告ケズシテ我ニ告ベシ天ノ狗ト云フ者ハ元ヨリ無ク神佛ノ罰利勝ト云フモ無キ事ナレハ崇

リヲ受ルト云フ事曾テ無シ然レトモ見ル如クノ高山ナレバ世ニ云フ山ニ酔フト云フ事ノ有ルマジキニモ非ズ其兆少シモ有ラハ竊ニ我レニ告ベシ心掛タル菓リアレハ與フベシ必ス他ヘ告ル事有ルベカラズト屹ト示シテ置ク

享和三年の和久田叔虎『富岳雪譜』は、強力の忠告に逆らつて下山用の草鞋を買わず、それがかえつてよかつたことを誇らしげに述べる。

強力来て曰各草鞋十足ツ、ヲ齎サレバ登降ノ用ニアツベカラズト小橋濱村ノ二子ハ之ヲ聞テ各草鞋十足ツ、ヲ買求タリ余ハ独旅行ニ草鞋ヲ好ザレバ常々草履六足ヲ買テ他ノ草鞋十足ノ用ニアツベシトイヘバ強力ガ曰客ハ數、此岳ニ降ルヤ且初テナルヤト余曰今ヲ初トス此岳ノ嶮易ヲ知ラズ只他ノ山ノ例ニナラフノミト強力ガ曰三国第一山ト標題シタル峻嶮ヲ降ニ他ノ山ノ例ニヨルベキヤ况ヤ平地ヲヤ衆人ノ所爲ニ随ヲ可トスト余ガ曰其好ム所ニ從ン艱ルトモ汝ノ足ヲ仮ズト強力曰靈岳ニ降モノ強言ヲ禁ス客ノ如キ初登ノ人ニシテ敢テ先達ノ辞ニ從ザルハ強トイフベシ然トモ客吾言ヲ用ザルベシ但路嶮ニ足疲ルトキニ及テ始テ吾忠言ヲモ思ヒ悔心ヲモ懷ベシトイヒツ、頓テ草履六足ヲ買來リ(略)

天保九年「五山駅程見聞雜記」も同様である。むろん、富士山以外にも多い。享保く宝暦間の植村政勝『諸州採葉記抄録』の予七月朔日此山(赤城山のことである)に登る。所のもの是を禁止すといへども彼山に登る。此山におゐて大小便をする事を常に禁止す。然りといへ共、予が従者其外人歩等も是をゆるすに、されども何のさわりもなし。同所華嚴の滝七十八間高き所より三方に落る。和国無双の滝といふ。此辺直根の上人參其外葉種品々有。

同国那須野、殺石那須が嶽の麓にあり。此所湯本といふ。彼殺生石を打割て様子を見、又なめて味を考見るに、さして常の石に替る事なし。此石の有所硫黄壺と見ゆる。此山の温泉涌出する時、殺生石の有所へ行逢時は、禽獸に至る迄忽死すといへり。予彼殺生石を打割て持參し二二三指上ル。那須の原七里四方ありといふ。昔はまわり百二十三里ありと村老の語り伝ふといふ。

のような記述といい、文政十年の竹村立義『御嶽山一石山紀行』の、当山の事他言すまじと誓ひながら、かくまで筆記せし事罪さり所なく、恐るべくはづべきなれど、村々明細書にも記し、又他の書にも記しあり。己れ誓ふ時、こころにおもへらく。

大猷院殿日光御造宮有てのたまはく、すべて仏神は人のなれ詣れば繁栄すと有て、かけまくもかしこく、

東照宮へ貴賤の参詣をゆるし給へりと聞く。予日光に詣で、かへるさ出流の窟に入し。是等も他言する事を禁せず。然るを当山のごとき至極の僻地にて、江戸の者聞もおよばざる多し。己れがごとき稀に詣たるも他言せざれば、彌参詣絶なん。かかる靈妙不思議の御山、吾人も多く咄し伝へ、結縁して参詣さすべきは、仏の衆生濟度の御心にもかなふべし。只其嶮岨のみ咄して、靈地なる事を語らざる輩は、かたらざるも亦可なり。故にはじめより他言すまじき事を口となへず、こころにおもはず。案内者の教なれば、刀劍をいただきたるのみ。かくて辛うじて麓に下る。

のような記述といい、そこにかがわれるのは、いずれも容易に他人に支配されない強烈な個性と冷静な判断、安定した合理的精神である。

四 その背景

そのような精神の基盤となったものは何かということ、紀行文学に与えた影響とあわせて、いささか述べておきたい。

さきに引用した『諸州採葉記抄録』について附記すると、この作品や、小野蘭山『遊毛記』（享和元）のように長文を記す例は、採葉記類ではむしろ少い。享和元『常野採葉記』、文化七年、水谷豊文『木曾採葉記』、同九年、小野蘭山『伊勢採葉記』、田代安定『遊霧嶋山記』など、大半は跋涉した山野の動植物に関する詳細かつ膨大なメモだが、紀行文の体裁はなさない。

ただ山崎安治氏も指摘される如く、この採葉記類の山岳紀行における位置は重要である。それは、仏教世界の再現としてとらえていた草木や花が、科学者の眼で把握され分類されていくことを意味した。次の例に見るように、旅人たちはともすれば積極的な興味をもって案内者に、草木や自然現象についての質問をあげせ、あるいは自らの手による素描を残している。

名を知らざる異草も数多あり。案内者に問へば。葉草なりと云り。
(鈴木牧之「苗場山に遊ぶ記」文化八)

是より廻る北の方に、差渡二尺余りの柄杓井水へ手の届く迄にたたへしは、金明水といふ銘水、旅人手水又目の薬として錢を取。

此所すべて焼土にて、水の溜るべき様なけれども、此場にかぎり清水出るは不思議なる事也。又あれはいか成山杯問ふ。更に取合ず。思ふに山上する人々は、皆後生の為とて景色地理の事は問人もなければ、錢取の外かかる事には取合ぬか。(『三の山巡』文政

六

こういつた科学的精神と支えあうかたちで近世の山岳紀行の特徴をかたちづくるのは、冒険家として自己を演出表現する作者の姿勢である。先述した、強方らに逆らっても自己の意志を貫き通す作者の主人公像は、近世紀行全体にともすれば見える主体的行動的な旅人像の典型であるといえよう。大淀三千風、野田成亮、橘南谿といった、近世の紀行文の代表的作家たちが、作品中に、多く登山や峠越えといった難所の場面を設定するのは、偶然ではないであろう。

また、蝦夷や九州といった、いわば水平の「異境」「辺境」とともに、山岳地帯は垂直の、あるいは国内における同様のものとして存したため、山岳紀行は、そういった辺境紀行と共通する報道性を有したことも見逃せない。

行厨ヲ開ントテ路傍ノ農家ニ立ヨレバ女子出テマツ足ヲ濯タマヘトテ水ヲ入テモチ来ル物ヲ見ニ罨ニモアラズ全木槽ナリ余笑テ曰実ヤ山家ノ調度トテ奇器ハナル哉ト主ノ曰敢テ奇ヲ好ニアラズ此里ハ竹林ナクシテ桶造ニ不便ナルユヘ数多ノ桶器木ヲ刳テ代用ユ甕ニ桶具ノ不便ナルノミナラズ(和久田叔虎『富岳雪譜』享和三)

祖谷に入りて五日をふるに道のほとりにも立やすらひて家の内を見入る□すへておほなこのかけたに見す芋のはたけつくとてうねほるおほなものおひてかつら橋わたるとしたふめのミ見つあやしミ思ひ待りつるか後にきけはおほやけの事につきてまかりむかふ奉行代官などとをりつれハをんなはかくれしのひて出すとなんゆうにやさしきところならひ也(太田信圭『祖谷日記』文政九)

このような土地の風俗の描写は山岳紀行の記述の中で大きな部分を占めている。

更にそれと矛盾するようであるが、山岳紀行には、日常の都市生活がそのまま移動してきているような、庶民性や娯楽性をたたえた生活臭のある旅の記録や、具体的な描写がままあらわれる。これは、特に富士に見られるような俗化、庶民化が、一方で知識人や科学者の宗教性否定を招きつつ、その一方で生じさせたものであろう。たとえば次のようなものである。

東口登りつきに薬師堂あり(略)傍の室に入て湯のミ御札買団子も喰ふ東表の□□にハ常に參詣多き故室もあまたありすへて五ツさしの団子五文ツゝに売ル

団子大キサ ○—○—○—○—○—
火にあふり喰ふもあり湯釜に温て喰ふ人もあり(中谷頼山『富嶽之記』享保一八)

いざや登山の仕度せんと我ハ行衣に印判のそこら有を着かへ外の五人リハ其俣の衣類にこそあれど雨具ハ夫々用意して我こそ笠ひとつのみなりせばござ一枚求めつゝ小雨に程よき道ならんと暇乞ハそこゝに荷物ハ強力に打まかせ立出れば行すが我ハ瓢に焼酎仕込五人ハ御山の御水を乞んと小徳利など用意して吉田を出ぬけ弓手へよぎり直に行浅間宮の大門入れバ兩側一二丁か其間右と左りの石燈籠ハすきもあらせず建並び山門入れバ大鳥井廻してみれば三尋ありて外に又なき鳥居なり(礎山『富士の道の記』天保一四)

牡丹亭にて名ぶつ葡萄衣掛、わさび、洋かん、栗、せんべい類買求、江戸へ送る。夜は橋回会品料理やへ案内、酒宴いたし。水菓

子名物。此料理屋へ売女おしうりに參。田舎言葉にて大わらい致。(略)当宿同様あしく。此辺あんころ餅名物、まつし。魚類更になし。椎竹ばかり、あきあき致。(堅山難場道中記) 万延元

五 風景描写

以上、具体例をひきつつ、近世の山岳紀行に見る、信仰から科学あるいは娯楽への推移、主体的主人公像の成立、それらを生み出したものとしての「採葉記」類の役割、辺境紀行としての報道性、山岳信仰の俗化や庶民化に伴う日常生活風の記述、等について述べた。最後にこの種の紀行では最もはじめにふれるべきであった、風景描写という点に関して一言したい。

山岳紀行の特徴の一つは、他の紀行よりはるかに、風景美についての記述が多いことである。

六七合あたり、かま石、えぼうしいはなどいふ所々は、草も木もすべてなく、焼たりとおぼしき物から、むらさき、あるいは黒色したるいさごの、かどだちたるを、からうじてよぢつゝ、未の時ばかり、八合目の石室につく(加茂季鷹『富士日記』寛政二)

此所にホラ貝草の黄咲有。春秋ならば珍敷花も有べけれども、夏の末なれば目にとまる物もなし。花咲ものは合歡斗にて、常は美しきと思ふ花なれども、先の赤きに日の照添ふて誠にあつき心地して、見やるもうし。(『三の山巡』文政八)

明れはとて立て行此辺樹木なし奇花珍草咲きたれて人間に見さるもの多し中にも黒百合の道もせに咲てうつむきたる所から何おもふらんとをかし(『白山紀行』)

眺望いかにと見やるに立山頂をあらハし鐘か嶽□の如く騎鞍ヶ嶽一鞭をあて駒か嶽の□で立る御嶽浅間芙蓉の遠影まで縹緲の間に粒々見えたり其餘の諸山ハ□伏して朝參するに似たり(同右)のような描写も多いが、そのみではなく、特に富士山などの場合、冒頭にあげた南谿の「名山論」にも共通する、いわば理論的な分析ともなつて美景論が展開される。

湖にさしおほはる富士の山の峯ハ雪真白に半より下ハ草山木山青ミわたれるこそ目さましけれかの田子の浦清見瀉の海をへたて原よしハらハ足高山宝永山のさハりあるに今この湖の汀にうち出見れば峰より一点のさハりなく外山なけれハ斜にはてなく山の裾はさながら湖水にひたり入り鶉の嶋ハ□に産屋か崎ハかたへにつらなれり世に二十四景の富士百富士の図とて写せし絵ものならずはしめてしる富士の風景はこの湖に臨みてこそとさるをいかにてむかし今の人のこの浦辺の眺望の余所にすぐれたる沙汰なきハむさしへ通ふ人といへと笹子山といふをすぐれハ見る事あらすこの道ハたゝ富士に登る御嶽さうしの輩ならてハゆきかよハねハかくめて度景ともわきまへしらざる也いてや我国に山の景をかそへていはんにいつくハあれと此山にまざるこなきハ誰もくいふ事にておのれも若きより此山ミむとて東のかたにさすらへありくことあまたゝひなりしか六十の老の後のおもひ出けふのなかにこそありけれとそゝろにひとりこちす(幻阿「宇良富士の紀行」寛政十一)

余諸国ニ遊歴スルノ間山水ニ遊ノ癖アリテ足跡ノ至ル所ハ嶮岨トイヘトモ適ザル所ナシ抑天下ニ名山大澤アリトイヘトモ富士ト名高クシテ且美観ナル山ハナシ是五尺ノ童子マデモ此山ノ名此

山ノカタチヲ知ザルハナキ所ナリサレトモ古今ノ画ニ名アル人ノ描ケル所ノ富士ヲ見ニ多クハ前蹤ヲ襲テ实景ヲ真写スルモノ少シ如何トナレバ画ニ名手ナリトイヘトモ足跡ノ至ラザレバ徒ニ之ヲ写ス事能ズ源応挙ノ生涯富士ヲ画ザリシトイフモ宜ナルカナ彼好テ真写ヲ做シ前套ヲ襲ザルガ故ナリ近ゴロ百富士ノ勝景ヲ真写スルモノヲミル尤此岳ヲ望ノ変化ヲ見セリトイフベシ然レトモ猶遺漏ナキニアラズ凡富士八百里ノ外ニアリテ眺望シガタシ(飯令高山ニ登リテ之ヲ望事ヲ得ルトイヘトモ僅ニ雲端天際ニ方寸ノ富士ヲ眺事ヲ得ルノミ勝景トモイヒガタシ甚近ケレバ却テ甚高カラザルヲ賞テイマダ見ザルノ先ヨリ思ヒノ外ナル事ニオモヘル人モアルベシ或人ノ説ニ倉澤ノ富士ハ却テ目ノ前ニアリテ胸ツカヘタルヤウニ思ヘルトイフ是富士ノ眺ニ飽ル人ノイヒタルナルベシ余謂ク富士ハ倉澤ヨリ以東ハ何レヲヨシアシトイフ事テ論ゼズ地ニ甲乙アリトイヘトモ何處トシテカ眺望ニアクベキノ地ナカルベシ但薩埵ヨリ西ハ近ニアリナガラ近山ノ隔アリテ却テ富士ヲ望ム事能ハズ東海道ニテハ遠州白須賀ノ駅東潮見坂ノ辺ヨリ見附駅ノ台アタリマデハ眺ムベシハヨリ以東ハ却テ富士ヲ見事能ハズ日坂金谷ノ辺ニ到テハ求テ高峯ニ上ラバ見コトを得ベケレトモ煩シ皆近山ノ隔アルユヘナリ関東ハ箱根ノ山頭ノ眺ヲ過テハ鎌倉七里ノ浜ノ辺ヲヨシトス夫ヨリ東ハ江戸ハ言ニ及バズ東北ノ国々常陸上総下総下野ノ辺マデハ富士ヲ去ル事甚遠カラズユヘニ眺ベキ所多シ余ガ郷國遠州ノ中ニハ眺ベキ処多キ中ニ毛新居ノ渡舟ヨリ望ヲ勝景トス是旅人ノ皆知ル処也余一日新居ノ渡ヨリ北ナル細江テフ処ニ浮テ眺タル富士尤ヨシ是土人ノ外ハ知モノ希ナルユヘ左ニ写シテ望富岳ノ補トス又武州栗橋ノ堤ノ

上ニテ望廼ノ富士ハ勝景ニアラザレトモ四方ノ名山筑波日光淺間
始トシテ十岳一望の間ニアルユヘ奇觀トモ言ベキ(和久田叔虎
『富士雪譜』 享和三)

富士山そのものの描写にしても

高きこと天にひとしく雪斑にすだれのごとく根の広き事ハ海際ま
で出て(堅木『富士之夢』 享保五)

なからばかりより雪は消て。白き糸を引くだしたらんやうに見
ゆ。ましろなるいたゞきも。只白きにはあらで。白きが中に濃淡
あり。高きと低きとくだりにすじを削成せる。たとへば白芙蓉の
弁の白きすじを引きたる如く也(土屋斐子『たびの命毛』 文化
四)

と精妙である。もとより、紀行文と風景描写は切りはなせない。だ
が、現実には近世紀行の作品中に風景描写と言える部分は案外に少
いのである。その中で、山岳紀行は、各自の風景に関する見解や議
論も含めた、種々の美景の表現を明確に生んでおり、この点から近
世紀行を検討していこうとするとき、さまざまな意味で、当時の日
本人の美景観をさぐる一つの基準や典型となしうるものである。

註

1 紀行文にもこのような傾向は反映している。熊野紀行は山岳紀行とい
より、舟旅の部分が多い。(白屋菅賢『熊野まうての記』)また、日光
紀行が中途で必ずといっていい程、筑波山にふれるのもこの山の印象深さ
を示すものであろう。

2 「しはしてたちとまりてひとりかひふやう、かゝるありきには酒をこそ
ものすへきにわすれきにけり、いかゝはせんといふ〜かたへなる家にい
りぬとはかりありてひさこめくものに酒いれてひさきききたりその家より

をさなきわらへいて、まるをもめてゆき玉へといふわらはのましりたらん
もよかめりと人ミうなつきてさきにたて、ゆく」。

3 信仰性の否定という積極的な意識ではないかも知れないが、次のような
記述もある。「角田ぬしいふこそ夏あつまの人まかり来て此山のかんなき
を道しるへとしてのはりにいかにせんかんなきにハかたにたふれたりあつ
ま入おとろき道もなき處よりにけ下りはたしにて追分に來れり彼かんなき
ハ其死したりしかのミならず上田なるもの、五六人にてまかりのほり
しか一人湯の平にて病ひいてきて靦籠なんとに打のりかへりぬと誓いほふ
の氣にあたりてかくあらんと打かたる」。

4 土佐群書集成。

5 この少し後に次のような記述がある。「サテ又アタリハ次第々々山峻シ
クナリテ砂ノ足ニ踏崩ス餘砂草鞋の間ニ入テ歩ヲ艱ス事甚シ一二丁ゴトニ
草鞋ヲ解テ砂ヲ出サレハ足心ヲ傷ルノ患アリ是時余ハ巽ニ陶山ニテ強
言セシ草履ナレバ砂ノ留ル患ナクシテ其煩ヲ免タリ余強カニ戯テ草鞋
ヲ買ザル強言ハ此アタリニテ思ヒシル事や如何ニトイヘバ強力モ今ハ答ル
辞モナク黙々トシテ居タリシガ同行ノ輩ハ余ガ足心ニ砂ノ留ザルヲ見テ
羨メルコト可笑ケレサテ弥益ニ峻キ砂路汗ヲ流シテ上リユクホドニ」。

6 この紀行は「常木」についてふれた項で「橋南深先生の紀行にも同じさま
に書るをいかにやと思ひわひけるも本意とけしこ、ちせらる」と記してい
て、「東遊記」をよく読んでみる。

7 「近代艶隠者」巻四の三「富士郡の賢濃」に「詠めつらしき。日本第一の
富士見る事と。大かたならぬ風景。吉原の茶屋にやすらひ。己をわれてまも
り居に。そこあるじの語は。是より行道讒にありて。ひたりのかたに見
る景こそ。爰をつたひてむかふに。出れば。富士郡の内の田舎宿有。此里より見
よるこゝる。付て尋ね求めて爰にいたれば。誠に聞しして寥々。峯は白雲
をかづひて稱虚清田子の浦浪。金毘羅を纏して催る。逸興樵夫良哥をうたつ
て。樹猿を叫ばしる。漁夫鉤竿をふせて。水鳥を伴ふ此様。実に腸を断のお

もひ。昔むかし日赤人の詠せしもあはれになつかしくて。分ならぬ泪に袖をねいして」とあるように、この種の「富士をどこから見るべきか」という論はかなり早くから広く存していたようである。

8 『たびの命毛』は東海道の紀行で富士登山そのものではない。作者は女性であり、山岳紀行には、女人禁制の山が多いこともあって、女性の作者の手になるものがほぼ皆無であるのも、その特色の一つである。ただしそれだけに「仰ぎ見る」山への愛は強かったようである。この紀行でも、富士を「この君」と呼んで人間に対するように慕う表現が多出する。

なお、参照した山岳紀行及びその関係書目は以下の通りである。

- 高野日記（頓阿） 写、統帝國文庫
- 善光寺紀行（莞恵） 寛正六写、群書類従
- 高野参詣日記（三条西実隆） 大永四写、統帝國文庫
- 身延道記（深草元政） 万治二板、架蔵
- 高野山路之記（鳥丸資慶） 元和八写、寛文九写、群書類従
- 高野山詣記（宗因） 延宝二写、校註佛文学会
- 身延鑑 貞享二板、近世文学資料館
- 富士一覽記（梅月堂宣阿） 板、統帝國文庫
- 熊野案内記 宝永二写、東大
- 古山日記 // 写、甲斐叢書
- 山道行記（可楽） 宝永三板、国会
- 富士之夢（堅木） 享保五写、京大
- 富嶽之記（中谷頼山） 享保一八写、東北大
- 諸国里人談（菊岡沾涼） 寛保二板、架蔵
- 諸国採葉記抄録（植村政勝） 享保五写、宝曆三写、国会
- 筑波の記（南湖庵） 宝曆三写、国会
- 乾山紀行（近松茂矩） 宝曆三写、四写、東北大
- 赤坂山旅枕 宝曆四写、京大
- 筑波紀行（柳九） 宝曆五板、校註佛文学会

- 春山踏（浅見句竜） 明和三板、無窮会
- 富士日記（池川春水） 明和五写、土佐群書類集
- 富士見紀行（内山逸峰） 明和八写、内山逸峰紀行文集
- 高野紀行（桐雨・浮流） 安永四板、楠南
- 甲州こまちの記（筠芽） 天明五板、架蔵
- 春の山路（宮永正建） 天明六板、無窮会
- 東西遊記（橋南谿） 寛政年間板、架蔵
- 熊野先生南山紀行（岸弘毅） 寛政元板、早大
- 富士日記（賀茂季鷹） 寛政二写、甲斐叢書
- 富士の詠 寛政五写、架蔵
- 富士記（大場維景） 寛政六写、筑波大
- 遊彦山記（石川剛） // 写、東北大
- 山つと（藤井高尚） 寛政七写、岡山県図
- 春能山都登（高林方朗） 寛政八写、碧沖湖叢書
- 宇良富士の紀行（幻阿） 寛政十一板、柿南
- 越の山つと（平千秋） 寛政十二写、筑波大
- 遊毛記（小野蘭山） 享和元板、国会
- 改元紀行（大田南畝） // 写、統帝國文庫
- 常野採葉記 // 写、岩瀬
- 富岳雪譜（和久田叔虎） 享和三写、国会
- 名山図譜（谷文晁） 文化元板、名所図会会集
- たびの命毛（土屋斐子） 文化四写、統帝國文庫
- 木曾採葉記（水谷豊文） 文化七写、国会
- 苗場山に遊ぶ記（鈴木牧之） 文化八板、統帝國文庫
- 伊勢採葉記（小野蘭山） 文化九写、岩瀬
- 遊筑波山記（小宮山昌秀） 文化一五写、国会
- 富士日記（芙蓉亭蟻乘） 文政八写、国会
- 三の山巡 // 写、国会
- 越知山紀行（芥川玉譚） 文政八写、内閣

- 祖谷日記 (太田信圭) 文政九写、徳島
 御嶽山二石山紀行 (竹村立義) 文政一〇写、国会
 御嶽日記 (小津久足) 文政十二写、慶大
 不二紀行詩 (大森君欽) 天保二板、大阪府
 両山紀行 (萬白堂仏牛) 天保五写、東大
 真間の道芝 (和田正) // 写、都立中央
 伊豆の山路 (竹尾寛齋) 天保六写、筑波大
 日光山志 (植田孟緒) 天保八板、名所図会全集
 五山駅程見聞雜記 天保九写、国会
 登立山記 (大塚新左衛門) 天保十一写、金沢市
 西山紀行 (萬白堂仏牛) 天保一四写、東大
 富士の道の記 (礎山) // 写、新潟大
 身延山久遠寺詣日記 (小林文五郎・保感) 弘化一写、東北大
 登嶽日記 (栗本鋤雲) 弘化三写、純宗園文庫
 上野山の記 (広瀬水順) 安政三写、慶大
 熊野日記 (熊代繁里) 安政六写、碧沖洞叢書
 浅間山の記 (多湖安利) 嘉永元写、東北大
 熊野まうての記 (古屋菅賢) 嘉永三写、九大
 踏雲日録 (宮部鼎蔵) 嘉永四写、内閣
 遊高尾山記 嘉永五写、東大
 山路の日次 (千家尊澄) 嘉永六写、無窮会
 あつまの高野詣 (椎園) 嘉永七写、東大
 堅山難場道中記 万延元写、国会
 天山日記 (阿蘇惟敦) 文久元写、東北大
 志賀の山越 (狩谷竹鞆) 文久三写、金沢市
 山道遊記 (岡田橋) 写、静嘉堂
 身延のみちの記 (伊達正示) 写、金沢市
 遊霧嶋山記 (田代安定) 写、国会

甲斐日記 (清水浜臣) 写、甲斐叢書
 嵯峨山遊覧記 (冷泉為村) 写、岡山大
 身延紀行 写、東大
 みのふのしるし 写、九大
 雲わけ衣 写、九大
 白山紀行 写、筑波大
 論文の性質上容認されると考え、一部を除いては、コピーもしくは写真のみで見ていることを了承された。また国会図書館本の大半は「江戸期山書翻刻叢書」に収録されたものによる。